

くじら日記

太地町立博物館から

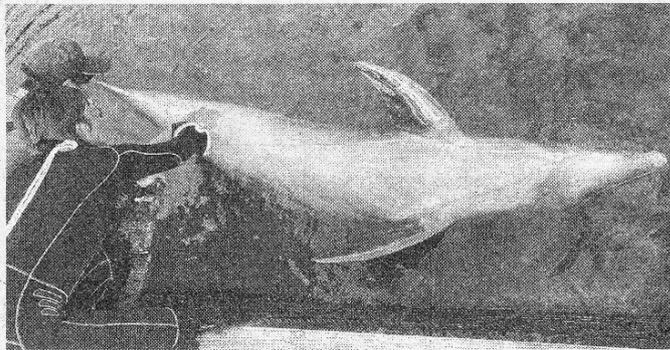


くじらの博物館で保管する資料の中から、約20年前の興味深い研究計画書が見つかりました。「凍結精子を用いた小型鯨類への人工授精に関する研究」です。水揚げされた野生個体から精液を回収する方法や、その精子の凍結方法を研究し、最終的には人工授精技術の開発を目指すものです。複数の水族館と大学との共同研究で、くじらの博物館は精液の採取と保存が主な役割でした。

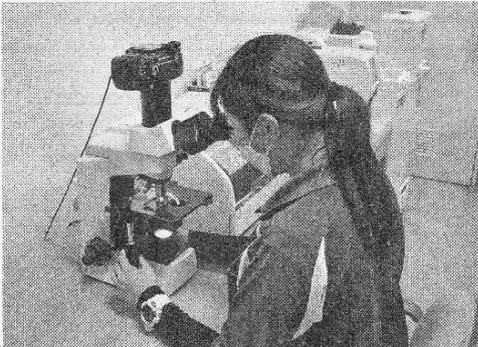
当時、研究に携わっていた獣医師に聞くと、「飼育鯨類の遺伝的多様性を維持するのに非常に意義がある研究だった」と振り返ります。残念ながら、野生個体の精液の利用はさまざまな事情によりかなわず、この研究は志半ばで断念せざるをえなかったようです。

鯨類の繁殖⑥

人工繁殖の研究でバンドウイルカから精液を採取した



顕微鏡で精子の有無や状態を確認するスタッフ。いずれも太地町



しかし、国内では、飼育鯨類での人工繁殖の研究が進められ、2003（平成15）年には国内初となる人工繁殖によるバンドウイルカの出生に

成功しました。その後、カマイルカで成功し、方法も多様化するなど、多くの成果が報告されています。

一方、くじらの博物館で過去20年間に出生した鯨類はいずれも自然繁殖（雌雄の交尾によるもの）で、人工繁殖ではすっかり取り残されること

になりました。

こうした中、令和4年、三重大学大学院生物資源学研究所附属鯨類研究センターの協力により、人工繁殖に関する研究と実践技術の獲得に向けた計画をスタートすることができました。まずはトレーニングによって雄個体から精液を採取することが課題です。

20年間止まっていた人工繁殖の取り組みが、再び動き出した瞬間でした。今回踏み出した一歩は、くじらの博物館で暮らす9種の鯨類の命をつなぎ、水族館の役割の一つである「種の保存」にとっても欠かせない技術になるはずで

す。

（太地町立くじらの博物館 館長 稲森大樹）

①～④の行為をトレーニングし、10月、雄のバンドウイルカの精液採取に臨みました。勃起させることまでは問

に掲載します。

人工繁殖研究、一歩踏み出す



クジラの学術研究拠点として環境整備が進められる「森浦湾くじらの海」に、2019（令和元）年に迷い込んだ「スバル」。父系がバンドウイルカ、母系がミナミハンドウイルカのハーフの雄です。その稀有な生い立ちから計画された研究テーマに学術的意義が認められ、2020（令和2）年から飼育研究を開始しました。

鯨類の繁殖⑤



「スバル」の子供。ハンドウイルカ属雑種第2代となる—太地町立くじらの博物館

子宝に恵まれた雑種第1代

せず、あるいは誕生しても繁殖能力がないと考えられています。しかし、2種は飼育環境下になると容易に交雑するほ

ハーフのスバルはハンドウイルカ属雑種第1代で、その研究の柱の一つに「繁殖」があります。雑種第1代ではどうなのでしょう。まずは、スバルの性状態を調査することから始めました。2021（令和3）年5月、月1回の血液検査で、性ホルモン値の上昇がみられ、体内での精子の正常な発育が期待できました。早速、出産・育児経験がある雌のバンドウイルカ「さくら」と「レダ」をスバルと同じプールに移し、交尾できる環境を整えました。

すると、スバルは性器を体外に出し、それを餌に向けるなど、発情行動が頻繁に見られるようになりました。しかし、雌2頭との相性はあまり良くなく、不安もありました。夏が過ぎたころ、定期的な検査から、さくらとレダの妊娠を知りました。無事に交尾に至ったようです。今年8月、さくらとレダは臨月を迎えました。出産が始まったのはさくらからですが、破水から出産まで時間がかかったうえに逆子で産まれ、残念ながら当日中に死亡してしまいました。続くレダは幸い、正常に産出し、さくらも育児に加わったことで、安心しました。赤ちゃんは、今もすくすくと成長しています。

赤ちゃんはやがて大きくなり、子を授かり、その子供もまた新たな命をはぐくむと思われまふ。この命の連鎖が、鯨類の分類を考えるうえで貴重な知見となり、種の適正な管理に役立つときが来るかもしれませぬ。

（太地町立くじらの博物館 館長 稲森大樹）

◆ 原則、第1日曜日に掲載します。